の「治療」や「健康」の維持・増進であることを踏まえると，本書が対象とする激動の時代のベトナムの人びとの暮らしや生活習慣等がどのように変容していき，そのなかで「健康」や「疾病」がどのようなものであったかについて踏まえたうえで検討する必要があったのではないだろうか．これらが明らかにされることで，ベトナムにおける「伝統医学」の意義や，それが制度化されていく必然性をより深く理解することができるだろう．医療の制度化は，政治経済的な変化に加えて，しばしば人びとの生活変容や疾病の流行によってもその必然性が顕となる．とりわけ，未知の感染症のパンデミックに人びとの暮らしが晒され社会が大きく変容しつつある今日においてはなおのこと，医療の制度化と疾病との関係性について丹念に検討する必要があるだろう．

ふたつ目は，伝統医療で使用される薬剤資源とその知的資源の所在をめぐる問題である．ベトナムに限らず，伝統医療の制度化をめぐりしばしば顕在化するのが，原薬を含む薬剤資源およびそれに関する知識の所有をめぐる政治経済的な軋轢である．とりわけ，20 世紀以降の国家主導の伝統医療の制度化について議論するのであれば，避けてとおることのできない問題だろうが，本書では，これらについての言及がほとんどない．ナショナリズムの拠り所としてベトナム独自の文化としての「われわれの医療」が希求されていくことと同時に，グローバル経済のなかでの伝統医療資源の価値とそれに対する制度化についての検討がなされることで，ベトナムの伝統医療について，対旧植民地宗主国，対中国，対アメリカといった限られた関係性にとどまることなくより広い視点で検討することができるのではないかと考えられる．

世界中がパンデミックに巻き込まれた歴史的な転換期を経て，人びとの暮らしや健康，医療がもつ社会にとっての意義が劇的に変容する今日，伝統医療研究は今後も検討すべき課題が山積している．本書で示されたベトナムの伝統医療の制度化の研究は，新たな頁とともに更なる展開が大いに期待されるものであろう．

高田　明．『狩猟採集社会の子育て論―クン・サンの子どもの社会化と養育行動』京都大学学術出版会，2022 年，288 p.

大塲麻代 *

本書は，『生態人類学は挑む』シリーズ全 16 巻のうちの第 8 巻である．著者は，（ポスト）狩猟採集社会の子育てに関するこれまでの先行研究を概括し，約四半世紀（現地での総滞在期間は 2021 年 10 月時点で 48 ヵ月間）にわたるフィールドワークの知見から，狩猟採集社会の子育てを再考している．本書は子育て論であるが，なぜ著者は狩猟採集社会の子育てに着眼したのだろうか．第 1 章でふれているように，著者は元々心理学を専攻し，その後人類学に転向している．その過程で，発達相談員の見習いとして乳幼児の発

* 帝京大学外国語学部

達の診断や療育にたずさわった経験をもつ（p. 2）．生態人類学は食物獲得活動と人口維持活動をヒトの種の特徴として中核的な研究テーマに据えている．子育てはまさにこの両者をつなぎ，文化的体系の再生産・改変の仕組みを理解可能にする（p. 13）．それゆえ，著者は子育てに着目しているのである．ミクロの視点から子育てを論じつつ，その射程の先には壮大なヒトの種の発達に関するマクロな視点があり，本書はこの2つを見事に架橋している．

著者の調査対象は南部アフリカの狩猟採集民族サンである．現地での彼らの自称はジュホアンであることから，本書でもジュホアンとしている．また，ジュホアンと近縁な集団であるクンを著者が長年研究対象としていることから，ジュホアンと区別するためにクンも用いられている．本書は主にナミビア北中部のエコカで収集されたデータに基づく議論である．以上をふまえ，以下では本書の章構成にしたがい各章を概説し，その後評者の感想を述べることにする．

第1章 生業活動と子育て
第2章 サンの文化・生態学的な多様性
第3章 授乳
第4章 ジムナスティック
第5章 初期音声コミュニケーション
第6章 子ども集団活動
第7章 子育ての生態人類学再訪

第1章の「生業活動と子育て」では，狩猟採集民族の子育てに関する民族誌的資料の議論と本書の理論的枠組みが紹介されている．本書では膨大な量の民族誌的資料が紹介されているが，なかでもメルビン・コナーとパトリシア・ドレイパーによるジュホアンの子育て論は，本書における検証材料のひとつになっている．本章は，狩猟採集社会の子育てについて，本書を読み進めるうえで把握しておきたい重要な論点が体系的に整理されており，後章の礎になっている．

第2章の「サンの文化・生態学的な多様性」では，著者が長年フィールドワークを実施しているナミビア北中部の自然環境や歴史的背景，サンの村の形成過程，フィールドワークの概要などが記されている．特に，狩猟採集民族のクンがいかにして複合社会を成立させたか，宣教団とのかかわりも含め，その後のクンの生活スタイルや子育てに影響を及ぼした諸要因が示されている．興味深いのは，狩猟採集活動に基づく遊動生活を送っているジュホアンに対し，クンは定住性・集住性が強く，農耕牧畜の要素を併せもつ生活スタイルに変容していることである（pp. 36–43）．この違いが，次章以降で明らかにされる養育行動の異同につながっている点はおさえておきたい．

第3章は「授乳」について，周密な参与観察と精緻な分析からこれまでの定説に異論を唱えており，刮目に値する．たとえば，授乳が極めて私的な空間で行なわれる欧米や日本と比べると，クンの授乳はずっと応答性と公共性が高いとされる（p. 57）．また，クンでは広い年齢層で年長児が乳幼児のケアをする例が確認されているが，これはジュホアン

ではみられず，狩猟採集民族でも異なる養育文化が形成されていることを明らかにしている（pp. 69–71）．さらに本章では，母子間で形成されるジグリング（軽くゆする行為）と吸てつについても定説を覆す内容が示されている．乳児と養育者間の相互行為を微視的かつ丁寧に観察することで論証している，得心のいく章である．

第 4 章は「ジムナスティック」について，養育者―乳児間の相互行為が写真とともに詳述されている．ジムナスティックとは「養育者が乳児を膝の上で抱え上げ，立位を保持，あるいは上下運動させる一連の行動」（p. 111）を指す．本章では，ジムナスティックを行なうと生後 2 ヵ月経っても歩行反射は消失しないことや，クンにおけるジムナスティックは歩行のための訓練よりもむしろ「あやし」として機能していることなど，定説とは異なる分析結果が示されている．また，地球を俯瞰するとみえてくる気候と子育ての関係性についてもふれており，大変興味深い章である．

第 5 章は「初期音声コミュニケーション」について，乳児向けの発話とコミュニケーションがどのように乳児の間主観性の発達につながるのか論述している．たとえば，養育者による乳児への特徴ある発話は，個体発生的発達に対し言語習得に影響を及ぼすと考えられてきたが，サンをはじめとする伝統社会では，乳児期初期に言語習得を意図した動機づけはみられない（p. 177）．また，養育者が乳児に睡眠を促す意図で行なう子守唄も，サンではほとんどみられない．むしろ，クンの養育者による子守唄は遊戯性を備えており，共同的音楽性により間主観性を発達させていることが示唆されている（pp. 179–181）．このような深い洞察は，初期音声コミュニケーションに関する研究の再考を促すものであり，克明な観察と思索に基づく著者ならではの論考である．

第 6 章は「子ども集団活動」について，多面的に子どもを理解するうえで重要な観点が数多提示されている．特に，子どもがどのように社会化していくのか考察している．たとえば，現在のクンの子どもたちは 2 歳児頃から多年齢子ども集団に参加するようになり，この集団をとおして子どもたちは社会化を達成していく（p. 219）．急速に変化する現代社会において，著者は「子どもたちの社会組織は，深層構造におけるレジリエンスと，表層構造における柔軟性や可塑性によって特徴づけられる」（p. 224）と分析しているが，その明晰さには舌を巻く．本章は，ヒトの種になぜ長いコドモ期が誕生したのかについてもふれ，多面的で多角的な深い議論になっている．

第 7 章は「子育ての生態人類学再訪」と題し，第 1 章でふれたレフ・セミョノヴィチ・ヴィゴツキーの発達に関するアプローチと関連づけながら，狩猟採集社会の子育て論を再考している．本章は，ヒト，文化，自然環境が相互に入り組み織り成す子育てのダイナミズムとその諸相を総括したうえで，異なる発達のアプローチに即し，ミクロとマクロの視座を統合させた論考になっている．広範にわたるテーマを扱いつつ，ひとつひとつの

議論は深い思考に裏打ちされており，読み応えのある章になっている．

本書を通読した感想を述べたいと思う．本書は，狩猟採集民族の子育てをとおして，ヒトの種がどのように自然と共存しつつ発達してきたのか，「ヒト本来の子育て」を，個体発生的発達，文化―歴史的発達，系統発生的発達から再考した大著である．膨大な民族誌的資料をふまえつつ，自らのフィールドワークで得た豊富な知見に基づき，ひとつひとつの定説を複眼的に検証し喝破している本書は，すべての章において読者を納得させるに足りうるだけの論拠をもつ．数多の名著を上梓している著者の主著に『相互行為の人類学―「心」と「文化」が出会う場所』がある．本書ともつうじる内容であり，そこには次のような記載がある．「行為はその文脈に埋め込まれ，その場に状況づけられて生じるいっぽうで，ある行為はその場を変化させ，それに続く行為のための文脈を構成する」［高田 2019: 19］．正に本書でも第 3 章から第 6 章でこの過程が示されてきた．

評者が疑問に思ったことのひとつは，本書で示されたデータが 20 年近く前のものを含むため，急速に変化する現代社会において，果たしてどの程度本書でふれた内容が今も不変なのかである．たとえば，第 6 章で幼稚園プロジェクトが国際機関と政府により導入されたが，結果的には子どもたちに馴染まず機能しなかった事例が紹介されている（pp. 201–203）．この状況は今も変わらないのか，あるいはむしろ積極的な就学がみられるようになっているのか疑問に思った．

また，本書で示唆された共同的音楽性による間主観性の発達は大変興味深い内容である．トマセロ［2006］によれば，乳児は生後 9 ヵ月頃になると，他者を自分と同じような意図をもつ主体と理解するようになるが，それは養育者（大人）とのコミュニケーションをとおして発達させるとされる．しかし，著者が本書でも指摘しているように，トマセロの議論に養育者の多様性はみられない．これからすると，本書が指摘する養育者の多様性や共同的な養育への着目は，従来普遍とされてきた養育行動の定説に再考を促すものであり，重要な視点である．

本書は，著者による圧倒的な文献量をもとに，克明に記録された膨大なフィールドワークのデータと，精緻で卓越した分析力のそれぞれがパズルのピースとなり，壮大な絵図となって論じられている高著である．分野を跨ぎ極めて体系化された理論に立脚した本書は，狩猟採集社会の養育行動に関するこれまでの定説を喝破し，真正にせまる子育て論になっている．本書からは，現地の人びとに寄り添い続けた著者の優しい眼差しと，現地に対する敬愛が溢れんばかりに感じられる．本書カバーの桃色と年長児に背負われた幼児の表紙絵は，本書を絶妙に表顕し，数多挿入されている写真とともに読者を惹きつけている．ヒトの種はなぜ長いコドモ期を有するのか，本書はこのシンプルな問いの裏側にある偉大な人類の歴史と向き合っている．学問の奥深さと飽くなき探究心に満ちた本書が，ひとりでも多くの読者に届くことを願ってやまない．是非ご覧いただきたい．

## 引　用　文　献

高田　明．2019.『相互行為の人類学―「心」と「文化」が出会う場所』新曜社.

トマセロ，マイケル．2006.『心とことばの起源を探る―文化と認知』大堀壽夫・中澤恒子・西村義樹・本多啓訳，勁草書房.